



TITLE:

研修員 日本学術振興会特別研究員  
受託研究員 特別研究学生 研究生 所  
内談話会記録 公開講座 夏季セミナー  
市民公開日について(Ⅰ 研究所の  
概要)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

研修員 日本学術振興会特別研究員 受託研究員 特別研究学生 研究生 所  
内談話会記録 公開講座 夏季セミナー 市民公開日について(Ⅰ 研究所の  
概要). 霊長類研究所年報 1991, 21: 39-41

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164286>

RIGHT:

# 大学院学生(平成2年度)

## 霊長類学専攻

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
五百部裕	D5	加納隆至	ビグミーチンパンジーのオスの社会学的研究
伏見貴夫	D4	久保田競	霊長類のコミュニケーションに関する実験的研究
室山泰之	D4	杉山幸丸	バタスモンキーの社会生態学的研究
大石高生	D3	久保田競	前頭葉の機能と伝達物質の関係について
小林秀司	D3	江原昭善	ティティ属( <i>Genus Callicebus</i> ) 3種の系統関係
高井正成	D3	江原昭善	南米コロンビアのLa Venta 地域産出の霊長類を含む中新化石哺乳類について
山下晶子	D3	大島 清	神経系の個体発生
井上美穂	D2	竹中 修	DNA 多型を用いたニホンザルの父子判定
鈴木良太	D1	野澤 謙	分子進化によるテナガザルの系統解析
中村克樹	D2	久保田競	情動や記憶における扁桃核のはたらき
Soumah Aly Gaspard	D2	杉山幸丸	高崎山におけるニホンザルの採食戦略
小林 隆	D1	加納隆至	都井岬の半野生馬の社会生態学的研究
河本敏男	M2	久保田競	頭頂連合野の入出力関係の研究
松村秀一	D1	加納隆至	ニホンザルオス間の社会的相互作用
橋本千絵	D1	加納隆至	野生ニホンザルの採食戦略
宮地剛士	M2	久保田競	前頭前野における視覚性刺激のはたらき
植木 浩一郎	M2	久保田競	随意運動の発現機構の研究
小川秀司	M2	加納隆至	チベットモンキーの社会学的研究

揚妻直樹	M2	加納隆至	ニホンザルの採食行動と食物の生産性
大野央人	M2	杉山幸丸	チンパンジーの社会的相互作用
田中 香	M1	加納隆至	ニホンザルの採食行動発達
近藤 あや子	M1	杉山幸丸	ニホンザルの宥和行动
花澤明敏	M1	久保田競	「注意」の神経生理学的研究
関根雅夫	M1	小嶋祥三	母子分離の行動的・生理的影響

## 研 修 員

氏名	指導教官	研修題目	研修期間
鮑 秀芳	野澤 謙	霊長類の健康管理に関する生化学的及び細菌学的分析	元.10. 1 2. 9.30
広谷 彰	杉山幸丸	家畜の生態学と人との社会交渉	2. 4. 1 2. 9.30
芝原総子	杉山幸丸	ニホンザルメスの糞中ステロイド分析による血中ステロイド動態推定法の確立及び社会的要因とゴナドトロピン性腺ステロイド量との関連性についての研究	2. 4. 1 3. 3.31
高崎浩幸	竹中 修	分子生物学的手法によるチンパンジーの父子判定	2. 7. 1 2. 9.30
竹中晃子	竹中 修	霊長類のグロビン遺伝子について	2. 8. 1 3. 7.31
瀬戸口 美恵子	加納隆至	小型哺乳類の社会学的研究	2. 8. 1 3. 7.31
友清和彦	中村 伸	霊長類の血液凝固因子に関する研究	2. 9.18 3. 3.31

## 日本学術振興会特別研究員

氏 名	指導教官	研 修 題 目	研修期間
板倉昭二	松沢哲郎	チンパンジーによる社会的自・ 他の認知と人称 代名詞の使用に 関する実験的研究	元. 4. 1 } 2. 3.31
古市剛史	加納隆至	霊長類集団間移 籍個体の生活史 —「母系」社会 と「父系」社会 の比較研究—	元. 4. 1 } 3. 3.31
中川尚史	杉山幸丸	西アフリカ・カ メルーンの乾燥 サバンナにおけ る霊長類の比較 採食生態学的研 究	元. 4. 1 } 3. 3.31

## 受託研究員

氏 名	指導教官	研 修 題 目	研修期間
後藤 啓	中村 伸	血液凝固要因子 に関する研究	2. 4. 1 } 3. 3.31

## 特別研究生

氏 名	指導教官	研 修 題 目	研修期間
友永雅己	松沢哲郎	霊長類の認知機 能の実験的分析	2. 4. 1 } 3. 3.31
上野吉一	小嶋祥三	フサオマキザル ( <i>Cebus apella</i> ) urine washing の基礎的研究	2. 4. 1 } 3. 3.31

## 研 究 生

氏 名	指導教官	研 修 題 目	研修期間
嶋田 誠	庄武孝義	霊長類における 集団遺伝学	2. 4. 1 } 3. 3.31

## 所内談話会記録

- 第1回：平成2年5月31日  
杉山幸丸（京都大・霊長研）「ボッソウのチンパンジー」
- 第2回：平成2年6月28日  
和田一雄（京都大・霊長研）「キンシコウの予備調査から」
- 第3回：平成2年10月26日  
Erik Trinkaus（ニューメキシコ大・人類学部）  
「Neandertal behavior: Current approaches and interpretations」
- 第4回：平成2年11月16日  
Andrew N. Meltzoff（ワシントン大）  
ヒトの乳幼児の模倣について
- 第5回：平成2年12月26日  
庄武孝義・森 明 雄（京都大・霊長研）  
「南エチオピア高原とオガデン地方におけるヒヒの分布について」
- 第6回：平成3年2月7日  
三上章允（京都大・霊長研）  
「側頭葉における認知と記憶」
- 第7回：平成3年3月7日  
川本 芳（京都大・霊長研）  
「ドブネズミの集団遺伝学的調査」  
（談話会係：庄武孝義・諏訪 元・杉山幸丸）

## 公 開 講 座

「霊長類の進化」  
霊長類研究所では、8月23・24日の両日にわたって公開講座を開催した。今年は第6回目である。参加者は中・高校教員が圧倒的に多いものの、予備校生、会社員、主婦と幅広い。例年どうり大多数は東海地域在住者であるが、近畿や遠くは盛岡からの参加者もあった（定員80名）。今回は、霊長類の特徴を大脳生理学、遺伝学、動物社会学、人類学の観点から取り上げ、さらに現在、直面している人間の問題まで話題を押し進めた。また、参加者全員に対し実習を行い、自分自身で研究の現状が少しでも理解できるようにと配慮した。

講義題目と講師は以下のとおりである。

総 合 司 会	相見 満
脳の発達	林 基治
ニホンザル集団の遺伝学的構造	野澤 謙

家族の起源ーゴリラの社会学ー	山極寿一
人間の条件を探る	江原昭善
神経生理学実習	三上章允
心理学実習	松沢哲郎
形態学実習	相見 満

## 夏期セミナー（第2回）

学部学生を対象とした夏期セミナーを開催した。70名を超える応募があり受け入れ限界の40名とした。東北大学から九州大学まで16大学からの参加があった。

7月30日（月）

9:30~10:00	ガイダンス（竹中 修）
10:00~11:00	形態基礎研究部門（毛利俊雄）
11:00~12:00	神経生理研究部門（久保田競）
13:00~14:00	心理研究部門（小嶋祥三）
14:00~16:00	社会・生活史研究部門・ニホンザル野外観察施設（杉山幸丸、加納隆至、大澤秀行）
16:00~17:00	所内見学
19:00~	懇親会

7月31日（火）

9:00~10:00	変異研究部門
10:00~11:00	生理研究部門（目方文夫）
11:00~12:00	生化学研究部門（景山 節）
13:00~14:00	系統研究部門（相見 満）
14:00~15:00	サル類保健飼育管理施設（松林 清明）
15:00~17:00	総合討論（各関係教官）

## 市民公開日について

広報委員会は平成2年度より研究所の市民公開日をもうけることとした。これにはいくつかの理由がある。まず研究所が目的としているところや現在行なっている研究を地域の人々に知ってもらい理解をいただくことが第一の目的である。ついで所内のサルのケージが動物園のようにはなっていないので危険であることや1989年10月のチンバ

ンジー逃亡事件の際、外に出た「アキラ」が所内に遊びにきていた小学生につられ所外に出たこともあり、事件を契機として研究所を原則として立入禁止にしたことも理由のひとつである。

公開日を平成2年10月21日（日）午後1時より4時までとした。予測がつかないので初年度は丸山、富岡地区の中学生以上の人たちを対象とし、各区長にお願いし案内状をおくった。好天に恵まれたこともあり、約100名の来訪者があった。所長の挨拶と岩本光雄教授による「サルの話」という約一時間の講演の後、約二時間の放飼場の見学、研究所紹介のビデオやパネルを使った研究の説明と質問の時間をもうけた。また1.感想、2.研究所への意見、注文などの項目でアンケートを依頼したところ30名からの回答があり、殆どすべて好意的なものであった。（文責：竹中 修）

## 学位取得者と論文題目

理学博士（課程）（霊長類学専攻）

山下 晶子：Ontogeny of cholecystokinin-immunoreactive structures in the primate cerebral neocortex.

理学博士（論文）（霊長類学専攻）

Bambang Suryobroto: An estimation of the biological affinities of seven species of Sulawesi macaques based on multivariate analysis of dermatoglyphic types.

理学修士（霊長類学専攻）

揚妻直樹：ヤクシマザルの活動時間収支と遊動域利用

植木浩一郎：行動発現のメカニズムー運動関連皮質の機能

大野央人：チンパンジーにおけるラテラルティの発現

小川秀司：チベットモンキーのブリッジング行動における三者の社会関係